

研究・調査報告書

報告書番号	担当
465	高崎健康福祉大学薬学部細胞生理化学研究室
題名（原題／訳）	
Effects of clozapine on ethanol withdrawal syndrome in rats. ラットでのエタノール禁断症候群に対するクロザピンの効果	
執筆者	
Kayir H, Uzbay T.	
掲載誌（番号又は発行年月日）	
Alcohol Alcohol. 43(6):619-625 (2008)	
キーワード	
アルコール依存症、禁断症状、クロザピン	
要 旨	
<p>目的： 統合失調症患者で合併症としての物質使用（乱用）は珍しくなく、病気の予後にも影響する重要な因子である。一方、薬物依存は精神障害の存在を推定させる因子である。アルコールは最も頻繁に乱用される向精神性の物質であり、禁断症候群のような状態で出現する精神病的徴候に関係していると考えられる。本研究は、ラットでのエタノール禁断症候群（EWS）に対するクロザピンの効果について検討することを目的としている。</p> <p>方法： 実験には成体雄 Wistar ラットを使用した。エタノール（7.2%、v/v）は液体飼料で14日間ラットへ与えられた。対照ラットへはエタノールを含まない等カロリーの液体飼料が投与された。クロザピン（2.5、5、10 mg/kg）とその溶媒（0.1%酢酸）はエタノール離脱の1.5時間目と5.5時間目で皮下投与された。エタノール離脱の2、4、6時間目で、ラットの行動を5分間、観察して自発運動亢進、不穏、振戦、尾硬直、常同行動、身震い行動（wet dog shake）などを含めた退薬徴候を記録あるいは評点化した。6時間目での観察に続いて、ラットでの聴原性の痙攣誘発試験を行った。</p> <p>結果： クロザピンは有意に、用量依存的にEWSで生じる自発運動亢進、身震い行動（wet dog shake）、常同行動、振戦、尾硬直を抑制した。しかし、クロザピンは不穏や聴原性痙攣発作には有意な効果を示さなかった。本研究で使用した用量のクロザピンは対照ラットでの自発運動にいかなる変化をもたらさなかった。</p> <p>結論： 本研究の結果は、ラットで、クロザピンはEWSに対するいくつかの有益な効果を有していることを示唆する。従って、クロザピンはエタノール依存患者でいくつかの退薬徴候を制御する上で役立つものと考えられる。</p>	